日本医史学雑誌第四十二巻第三号　平成七年十月三十日受付
平成八年九月二十日発行　平成八年三月　七日受理

華岡青洲の麻酔法の普及について

―福井藩橋本左内による手術症例の検討―

松木明知

はじめに

日本の医学史はもちろん、世界の医学史においても華岡青洲の業績は特筆されるが、彼についての本格的な医史学的研究は呉秀三に始まるといってもよい。呉は大正九年（一九二〇）に青洲の伝記[1]を発表したが、同年呉はそれを大幅に増幅して大著『華岡青洲と其外科』[2]を上梓した。以来青洲に関する大方の関心も高まり、その学統や彼の業績の中で特筆される麻酔薬の開発とその応用、とくに乳癌の手術などに関する研究が活発に行われてきた。

筆者も専攻が麻酔科学であることから、青洲の麻酔薬「麻沸散」に多大の関心を持ち、とくに麻沸散による最初の全身麻酔下の乳癌の手術が、実際には文化元年（一八〇四）十月十三日に行われたことを、患者藍屋かんの死亡年月日を調査することによって確定し、長い間定説とされた呉[2]の文化二年（一八〇五）説は誤りであることを発表した[3][4]。

しかしながら青洲が永年苦心して開発した麻沸散による全身麻酔術に関しては、全国的にも殆ど普及されず、その理由は青洲が麻沸散の処方内容を高弟のみにしか伝授しないという秘密主義を取ったことが主な原因であるとの考えが一般的であった[5][6]。

筆者は日本麻酔科学史に関連して青洲の事績についても鋭意研究中であるが、[7] 青洲の門に学んだ津軽藩医三上道隆が彼の麻酔法を学んで帰国し、若い女性の鼻切断術を実施した事実を発掘し、[8] また明治三十年代においても佐賀県で華岡流の麻酔法が行われたことを見い出した。[9]

このような事実を考慮する時、青洲の麻酔法が普及しなかったとする従来の説は訂正されるべきで、実際には彼の麻酔法が全国各地で実施されたものの、その事実が未発掘の状態にあるのではないかと考えられる。これを立証するためには青洲の門人録に見い出される全国各地の弟子たちの事績を綿密に検索する以外に方法はない。今回は門人の一人福井藩の橋本左内を取り上げて検討して見たい。

一、橋本左内の華岡塾春林軒への入門

志士橋本左内の思想と行動については、山口宗之らによって詳しく研究されている。[10][11] 左内は先年「文藝春秋社」が企画した「日本を変えた国際人三十人」の一人にも選出され、[12] その政治思想的業績が高く評価されているが、医師としての左内については十分研究し尽くされているとは考えられない。例えば左内が大阪の緒方洪庵の適々斎塾に入ったことについては、[13] 山口も言及しているが、[14] 一方華岡塾にも入門している事実に山口は全く言及していない。

前掲の呉秀三の著書[2]の「附」として末尾に収載されている「華岡青洲先生春林軒門人録」の越前の国の条に[15]「嘉永四、七、二四、福井藩中橋本左内」が見えている。さらに遡ると「天保四、二、五、福井家中橋本春蔵」と「文化十五、五、十二、福井家中橋本春貞」の二条が披見されるのである。天保四年（一八三三）入門の橋本春蔵は左内の父、文化十五年（一八一八）入門の春貞は左内の祖父に当たる。春貞と左内は紀州平山の春林軒、春蔵は大阪の合水堂に入門したことになっている。

左内の華岡塾入門については、政治史的な面から見れば些細なことであろうし、その分野の研究者から見過されても

仕方がないが、医史学研究においても見過されてきたことは残念なことである。例えば『福井県医学史』[16]には、右に述べた華岡塾の門人録を引用しながらも、同書三九八頁の橋本左内の条においては、「これらの手術に華岡流の麻酔薬を用いたことから左内を随賢門下とする説がある。しかし今日までの調査ではこの真偽を確かめることが出来なかった。祖父春貞、父春蔵（長綱）ともに、華岡門とあれば、その伝授によったものであろうか。」と述べて、手術に関しては華岡流に従ったとしながらも、左内がその術を祖父と父から伝授されたと推察しており、華岡塾への入門については確認出来なかったとしている。

『福井県医学史』[16]が典拠とする『越藩福井医史及医人』[17]には「十六歳の秋慨然郷関を出て大阪緒方洪庵の門に入り専ら蘭方医学を学び」とあり、『若越医談』[18]にも「嘉永二年己酉、秋負汲游二浪華一、従二緒方某一、学二西洋医術一、」とあって、左内が華岡塾に入門したことは全く言及されていない。

中野操の『増補日本医事大年表』[19]には左内の手術については全く言及がないが、藤野恒三郎は左内の華岡塾入門と癌の手術に言及して[20]、次のように述べている。

適塾で学んだあと左内は、江戸に於て坪井信良と杉田成卿についているので蘭学は進歩したようである。華岡青洲の塾生名簿に橋本左内の名が見られる。ただし青洲の死後のことである。左内の父、橋本長綱が青洲について修業したことがあるので、適塾時代に左内が和歌山まで旅したのであろう。

右の記述は、左内の名前が春林軒門人録に見られるものの、入門というよりは、左内の父が学んだ春林軒であるから、なつかしく思って訪れたのであり、単に極めて短期間の旅行に過ぎなかったと藤野が考えていたことを示唆している。

以上のことから、つい最近に至るまで、左内の名前が「春林軒門人録」に披見されるにも拘わらず、その事実が大方

無視されてきたことが理解されるであろう。

二、橋本左内の春林軒への入門期間

左内が大阪緒方洪庵の門に入ったのは嘉永二年（一八四九）の冬である。一方和歌山平山の「春林軒」に入門したのは前述したとおり、嘉永四年（一八五一）七月二四日である。

従来の史料に閲しても、嘉永三年（一八五〇）から四年末（一八五一）までの左内の動静の詳細は明らかではない。嘉永三年（一八五〇）はずっと緒方塾に在学し、十月には宮永良山の帰郷に際して序を送った。嘉永四年（一八五一）五月十日には師の吉田東篁の弟の岡田準介に書幹を送っており、五月には梅田雲濱と会見し、またその頃横井小楠と二度面会している。

全集[21]に収載されている左内の書翰から左内の動静を記すと、書幹[22]「八」から「十」によって嘉永四年五月十日、十八日、二七日には在大阪とあり、書翰[23]「十一」から「十六」によって、六月五日から七月二十日まで左内は確実に大阪にいたことが知られている。全集の編者もこのように記している。しかし書幹[24]「十七」は書き出しが前掲の書翰と異なる。これは嘉永四年（一八五一）七月二十五日付の笠原良策宛の書翰であるが、冒頭には「今便ハ急飛脚ニて荷物無レ之候故扶氏遺訓次音ニ指上候。」とある。この手紙だけはそれまでの書幹とは異なって「急飛脚」で送られているのである。

書幹の内容は、左内が福井藩の蘭学振興のための緒方塾塾頭であった飯田柔平を推挙しようと努力していたが、飯田柔平の弟秀輔が売婦家で下疳に罹患し、さらに咽頭部痛、骨痛をも併発し、全身衰弱も著しくなったため、飯田柔平が福井に赴くことが出来なくなったと、自分の斡旋の不首尾を詫びているのである。

この書幹の書かれた嘉永四年（一八五一）七月二十五日は、左内が「春林軒」に入門した嘉永四年（一八五一）七月二十四日の一日後である。左内は二十四日にはすでに和歌山の平山に到着していたのであり、翌二十五日にこの書翰を書

いたのである。全集[25]の編者は左内がこの手紙を大阪で記したと註しているが、それは誤りであろう。

書翰[26]「十八」は嘉永四年（一八五一）九月朔日の日付を有し、宛先は在福井の吉田東篁である。横井小楠から勧誘を受けた熊本への遊学について述べたものである。文中「西遊」つまり熊本遊学が叶わない場合にはしばらく大阪で蘭学を研究し、改めて熊本へ行きたいと次のように述べている。「末塾之小生ニ候得ハ、何分来年春迄精々蘭学研究致居、其より罷帰…」

この文面によって左内が大阪にいたことが推察され、全集の編者も、この手紙に註して、「先生は大阪、東篁は福井」と註している。

右に述べたように書翰[24]「十七」と書翰[25]「十八」の日付と内容から考察すると、左内は嘉永四年（一八五一）七月二四日には和歌山の春林軒に到着していたことは明白で、同所への滞在は長く見ても約一ヶ月であり、九月朔日には帰阪していることは確実である。

左内の和歌山行の第一の目的は春林軒の入門にあったと思われるが、しかしこのように改めて短期間に限定した入門が許されていたか否かは明らかでない。当時の春林軒は青洲既になく、第四世の随賢つまり青洲の次子修平（鷺州）によって主宰されていた。[26]左内の祖父春貞、父春蔵の二代にわたる華岡塾への入門の実績が、鷺州をして左内の短期間の入門を許可したことも考えられる。

三、左内による手術例についての検討

嘉永五年（一八五二）閏二月一日、父の病気のため、左内は大阪から福井に戻った。彼はなお大阪に滞って蘭学を究めたいと考えていたが、止むを得ない事情であった。左内は父に代わって診療活動を精力的に行った。

山口もその事情[27]を「帰国後は病父に代わって患家の診療に当たり、父の死後嘉永五年十一月藩命により家督を相続、

医員に任ぜられて二十五石五人扶持を給され、新得の蘭方医学の知識をもって、東篁の母の乳癌を手術したのをはじめ、重患を治癒すること再三に及んだ。」と記している。

左内の手術に言及している文献は他にもあり、例えば『福井県医学史』[16]には「その師吉田東篁の母の乳癌の摘出、また一患者の陰茎切断等々、枚挙にいとまがないが、これらの手術に華岡流の麻酔薬を用いたことから、左内を随賢門下とする説がある」とあり、藤野[20]も「みっちり華岡流の外科術を修得したとする記録はない。ところが、左内が乳癌の手術を実施したとする左内の笠原良策宛書翰が全集に収められている。」と記して安政元年（一八五四）二月七日の書翰[29]「四五」を引用し紹介している。藤野は引き続いて「ここに引用された乳癌の話は、福井県医学史には引用されていない。しかし左内書翰をたどっていくと、この外に蘭学的事項は数多く見られるし、患者のことも見出される。」と述べている。前に引用したように『福井県医学史』[16]には手術のことが明記されており、藤野の記述は誤りである。

また中野操の『増補日本医事大年表』[19]には左内の華岡術入門についてはもちろん、左内の手術についても何の言及もない。右に述べたように左内の手術について諸書で言及されているものの、深く論考されていない。左内の施行した手術について比較的詳細に及んだ史料は『越藤福井藩医史及医人伝』[17]であろう。それには次のように述べられている。

嘉永五年二月父の病報に接し帰国偶々一梅毒患者に接し陰茎切断術を施し又旧師東篁の母の乳癌を手術す其麻酔薬には曼陀羅前一汁を用いたり

右によれば、左内は少なくとも二例の手術を曼陀羅花を成分とする麻酔薬を用いて全身麻酔下に施行したことになっている。この記事は『若越医談』[18]の次の記述を典拠としている。

嘉永五年二月左内父の病を聞きて帰国十月七日父終に起たす、十一月廿九日、親彦也家督弐拾五石五人扶持無違被下置表御外科被仰付、時に左内年十八、左内の大阪より帰るや一梅毒患者医のために陰茎の切断術を施せしが、父の彦也は病を力め杖に倚りて之を傍観し、左内の母を顧みて吾児の技此に至る我が願足れりと曰ひて悦びたりとぞ

前に引用したように『福井県医学史』[16]は、左内の医術については枚挙に暇がないとしているが、少なくとも外科手術に限定すれば、史料に披見される症例は陰茎切断術例と乳癌の手術例の計二例のみが知られているに過ぎないし、これは『若越医談』[18]を引用しての記述である。しかも『若越医談』[18]には前の引用に引き続いて「左内の患者を診るや、大患には一々病牀日誌を作れり、其日誌の残欠数葉前年まで橋本家に保存せしが、人に貸して遂に紛失せりと云ふ」とある。

これによれば左内自筆の手術記録や診療録は明治中期にはもはや散佚して、史料として使用することは不可能になったことを物語っている。したがって現在となっては、残された史料、就中、左内の書翰によってのみ研究が可能である。

さて現在知られる左内の手術例は少なくとも二例である。第一例の陰茎切断術については、患者の年齢などは不詳であり、手術施行月日については、左内が大阪から福井へ帰国後つまり嘉永五年（一八五二）閏二月一日以降で、しかも父が側で手術を観察しているから、父の死亡した十月八日以前である。この期間の左内の書翰を閲しても、関連する記述は披見されない。この患者の診療は梅毒であるというが、『若越誌談』[18]も「梅毒？」と疑問符を付けている。しかし、潰瘍、出血、尿閉などが甚だしくなれば、当然切断術も考慮されても不思議でない。筆者が本稿の要旨[30]を第九十二回日本医史学会総会で発表した際、『橋本左内』を執筆している白崎昭一郎氏[31]が筆者の側に来られ、「梅毒のため手術は行わない」と言われたが、氏の発言が必ずしも正鵠を得た発言とは思われない。華岡一門の手術記録を披見すれば直ちに理解される所である。しかしこれまでの史料によっては、果たして梅毒という診断が正しかったか、この手術が全身麻酔下に行われたか否か定かでない。その可能性があるとだけしか言えない。

次に第二例目の師吉田東篁の母の乳癌手術である。

書翰[32]「四四」（嘉永六年十二月十一日附）によって容態など患者の概要を知ることが出来る。この書翰は福井の左内から江戸の東篁に宛てたものである。

御老母様御容体先鴻申上候節ハ、少しも御異状無レ之、先々御同様ニ御座候處、本日九日小生稲葉家へ罷越候砌、準介君御咄ニ、乳岩梢増大致候様ニ被レ思、且亦肩背等時ニマリ候様ニ承る登御語有レ之……中略

九日ニハ良策も罷越相伺候由、良策も少し致レ増大候ト見受け候旨小生方へ申遣候。昨十七日良策同道ニ而罷出拝診致候處、先御手穏之方ニ而十二日御容体之通ニ御座候。尤も只今早急切断行ハデワ叶ぬと申程ニ而者無レ之候。

東篁の母を笠原良策と共に診察したが、乳癌は少しずつ増大し、背部違和感を感ずるが、今直ちに手術をしなければならない状態ではなく、東篁に明年早々帰国することを依願しているのである。実際に乳癌手術が行われたのは安政元年（一八五四）二月八日であり、この事情は二月七日付の笠原良策宛の書翰「四五」によって知られる。

御清祥被レ御勤一奉レ賀候。然ハ桜埒患者（吉田東篁の母―全集編者註）施術之義明八日午時と相定申候。左様御承知可レ被レ下候。且亦施術彼是手数ニ可二相成一候間、可レ成丈遅刻不ニ相成一御都合被レ下候様奉レ願度候。野拙四ツ半時迄ニハ罷越ノ存ニ御座候。右得二御意一度早々如レ此二御座候。頓首

二月七日

二白、御多用中誠ニ御迷惑之御義奉レ存候得共、何分ニも午前御出偏ニ奉レ願候。只今蒙翁（吉田東篁―全集の編者註）被レ見、野拙より日限可レ極旨被二申聞一候故、明日ト申上候事御座候。尚御都合二依り何日ニても宜御座候。無レ御覆

藏二可レ被二仰下一候　　以上良策大兄　病用

東篁の母の乳癌手術は二月八日に予定されたことが知られ、良策に手伝いを依頼したことも分かる。実際にこの通り行われたことは二月二十一日付の笠原良策宛の書翰[34]「四六」によって証明される。

…前略…乍レ御難吉田氏病人処方解凝剤中加連水掾加密候外、外用バルサム油熱ハ過日之処ニ而ハ罷斯其因ト存候へ共、今日又起熱致候處ニ而ハ、萬々一腸胃性ニてハ、無レ之哉ト愚推申候。……

手術が全身麻酔で行われたとは記されていないが、華岡一門では、乳癌の手術に対して麻沸湯を使用するのは通例であることから、まず全身麻酔が行われたことは確実である。

書翰[33]「四五」には「且亦施行彼是手数ニも可二相成一候間」とあり、短時間の手術ではなかったことを裏付ける。手術は「午時」に行われたが、現在の午前十一時から午後一時の間であり、左内は「四つ半時」午前十一時までには患家を訪れており、良策の「午」前の足労を依頼している。

手術二週間後の二月二十一日には、発熱が見られたものの比較的順調に経過した模様である。左内は翌二十二日に福井を出立して江戸に向い、三月五日[35]に江戸に到着し、以降坪井信良、杉田成卿、塩屋宏陰に入門した。したがって左内はこの後病人の管理を笠原良策へ託したのであり、このことは良策宛の安政元年（一八五四）三月二九日の書翰[36]「四八」で知られる。なお東篁の母は術後三年生存したという。[17]

四、左内の外科手術の習得

祖父春貞は文化十五年（一八一八）に華岡塾に入門しており、帰藩したのは文政四年（一八二一）六月で、翌七月には歿している。したがって、左内はもちろん、左内の父春藏（彦也）も春貞からは華岡流の手術の伝授を受けていない。父の春藏が入門したのは、天保四年（一八三三）二月五日である。

全集[37]の橋本家系図には春藏について「文政十二年入紀藩華岡随賢之門、修外科医、就京都名医其、修内科医、又就女医博士香川満貞学産科、三年而帰藩」とあるが、文政十二年（一八二九）に入門したとあるのは明らかに誤りである。華岡塾をはじめとして、諸所において三年間修業したのであるから帰藩したのは天保六年（一八三五）末か七年（一八三六）の初めであろう。

左内は十一歳の弘化二年（一八四五）に藩立医学所済世館に入って漢方を学んでおり、翌三年（一八四六）には父に代わって往診する程の早熟振りを示した。

このことからも理解されるが、左内は父春藏から、大抵のことは学んだに違いない。もちろん 春藏は華岡門の規則に従って「麻沸散」処方内容を左内に教えなかったと考えられる。左内の医術の上達振りは嘉永二年秋の緒方塾への入門によってより拍車がかかったと思われる。緒方塾在学中、深夜に乞食小屋へ出かけて実地の診療を試みたという逸話も彼の研鑽振りの一端と示唆するものであろう。

したがって知識と技術の習得に天才的であった左内にとって唯一必要なことは、直接華岡門をたたいて、「麻沸散」の処方の伝授を受けることではなかったかと思う。「得與不得在其人」というモットーの華岡塾であったから、左内の天才振りをもってすれば、一ヶ月足らずの間に秘方「麻沸散」の伝授を受けたことも用意に想像出来る。否、伝授を受けたからこそ、福井に帰藩してから、乳癌の手術を敢行出来たのであろうと思う。

おわりに

華岡青洲の麻酔法はそれを秘伝としたため、全国的に普及しなかったとする説が広く行われているが、それは誤りであり、それが実施された事績が発掘されていないからと筆者は考える。

その実証として、今回は福井藩の橋本左内を採り上げ、彼が少なくとも一例の乳癌手術を安政元年（一八五四）全身麻酔下に行っているとを論考した。

文献

（1）呉秀三「華岡青洲先生伝記」『医人』第九号附録六～二八頁、一九二〇（大正九年）
（2）呉秀三『華岡青洲先生及其外科』吐鳳堂、東京、一九二三（大正十二年）
（3）松木明知「華岡青洲と藍屋利兵衛の母」『日本医事新報』二四六七号、一二〇頁、一九七一（昭和四六年）
（4）松木明知「華岡青洲による最初の全身麻酔の期日」『麻酔』二一巻、三〇〇～三〇一頁、一九七二（昭和四七年）
（5）稲田豊「麻酔の歴史」山村秀夫編『臨床麻酔学書（上）』一～一一頁、克誠堂出版、東京、一九七八（昭和五三年）
（6）谷津三雄「麻酔の歴史」稲田豊、藤田昌雄、山本亨編『最新麻酔科学（上）』一六～一八頁、克誠堂出版、東京一九九五（平成七年）
（7）松木明知『麻酔科学のパイオニアたち―麻酔科学研究序説』克誠堂出版、東京、一九八三（昭和五八年）
（8）松木明知「津軽における最初の全身麻酔―藩医三上道隆の事績―」『日本医史学雑誌』三三巻、二〇三～二一七頁、一九八七（昭和六二年）
（9）前掲（七）三三～三七頁
（10）山口宗之『橋本左内』（人物叢書新装版）吉川弘文館、東京、一九九〇（平成二年）
（11）佐藤昌介、植手通有、山口宗之注「渡辺華山高野長英佐久間象山横井小楠」日本思想大系五五、岩波書店、東京、六八

六頁、一九七一（昭和四六年）

(12) 文藝春秋、七〇巻、八号、一六三頁、一九九二（平成四年）

(13) 緒方富雄『緒方洪庵伝（第二版）』岩波書店、東京、二二一頁、一九六三（昭和三八年）

(14) 前掲文献（十）三五～三六頁

(15) 前掲文献（二）四七二～四七三頁

(16) 中村覚郎（代表）『福井県医学史』福井県医師会、福井市、三九八～四〇〇頁、一九六八（昭和四三年）

(17) 笹岡芳名『越藩福井医史及医人伝』三秀社、東京、二三一頁、一九二一（大正一〇年）

(18) 『若越医談』一号一四～一六頁、一九〇五明治三十八年

(19) 中野操『増補日本医事大年表』一八六～一八七頁、思文閣、京都、一九七二（昭和四七年）

(20) 藤野恒三郎『日本近代医学の歩み』二五五～二五七頁、講談社、東京、一九七四（昭和四九年）

(21) 日本史籍協会『橋本景岳全集（一）』（続日本史籍協会叢書）東京大学出版会、東京、覆刻版一九七七（昭和五二年）

(22) 前掲文献（二一）十七～二二頁

(23) 前掲文献（二一）二二～三三頁

(24) 前掲文献（二一）三四～三五頁

(25) 前掲文献（二一）三四頁

(26) 前掲文献（二一）三五～三六頁

(27) 前掲文献（十）四三～四四頁

(28) 前掲文献（一六）四〇〇頁

(29) 前掲文献（二一）五八頁

(30) 松木明知「華岡青洲の麻酔法の普及―福井における橋本左内による二手術例について―」『日本医史学雑誌、四〇巻、一号、八二～八三頁、一九九四（平成六年）

(31) 白崎昭一郎『橋本左内』毎日新聞社、東京、一九八八年（昭和六三年）

(32) 前掲文献（二一）五六～五七頁
(33) 前掲文献（二一）五八頁
(34) 前掲文献（二一）五八～五九頁
(35) 前掲文献（二一）六二頁
(36) 前掲文献（一八）二〇頁
(37) 『橋本景岳全集（三）』日本史籍協会（続日本史籍協会叢書）、東京大学出版会（復刻版）、東京、一五六六頁、一九七七（昭和五二年）

（弘前大学医学部麻酔科）

Spread of Hanaoka's Method of General Anesthesia with Mafutsu-san : A Discussion of Surgical Operations by Sanai Hashimoto

by Akitomo MATSUKI

It had been generally accepted that Hanaoka's secretiveness was the most contributory factor in preventing his method of general anesthesia with Mafutsusan from becoming wide spread in Japan. However, the author found several cases of the use of general anesthetic according to his method in various areas in Japan. For instance, Doryu Mikami, a surgeon of the Tsugaru feudal clan entered Hanaoka's school to study his medicine for several years and came back to Tsugaru to perform an amputation of the nose of a young lady with syphilis in about 1864. Hanaoka's method of general anesthesia was also practised safely in the Saga area of Kyushu even in the year of about 1900.

The author studied in detail two cases of surgical operation under general anesthesia performed by Sanai Hashimoto, a physician of the Fukui feudal clan. One case was an amputation of the penis but no further detailed information was given to us. The other was an excision of the breast cancer of Toko Yoshida's wife. Yoshida was Hashimoto's teacher of Chinese Literature. The operation was successful and the patient was reported to have survived three years after the operation.

These facts strongly suggest that the method had been transmitted and practised in many districts in Japan by many disciples of his school. However, such cases have not been reported in detail. Thus the widely rumoured evaluation of Hanaoka's secretiveness is incorrect.